

ふりがな 学校名	ふくいけんりつわかきこうとうがっこう 福井県立若狭高等学校
-------------	----------------------------------

校長名：古谷 活也

所在地：福井県小浜市千種1-6-13

電話番号：0770-52-0007

(1)学習指導要領に定める目標等の実現状況の把握に関する研究	
研究対象教科等	国語(現代文)

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校は「社会に貢献するリーダーの育成」という教育目標の実現に向けて、特にコミュニケーションする力の育成に取り組んでいる。今春卒業した生徒の進路先は、就職が25人、短大専門学校が約100人、4年制大学(私立)約100人、(国公立)約110人である。

2 学校の概要(平成19年5月1日現在)

課程	学科	1年		2年		3年		4年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	6	220	6	229	6	221			18	670
	理数科	1	35	1	34	1	37			3	106
	商業科	1	35	1	35	1	36			3	106
	情報処理科	1	36	1	36	1	35			3	107
	計	9	326	9	334	9	329			27	989
定時制	普通科	1	8	1	16	1	5	1	9	4	38
計		10	334	10	350	10	334	1	9	31	1027

教員数79名(10名)

研究対象となる理数科では「現代文」は2年次に4単位、3年次に3単位を履修する。

II 研究の内容及び成果等

1 調査研究について

(1) 研究主題

「話すこと・聞くこと」領域における評価の研究

(2) 平成19年度の調査研究のねらいと対象

[調査研究のねらい]

本調査研究のねらいは、「話すこと・聞くこと」領域における評価の規準と方法を開発することにある。

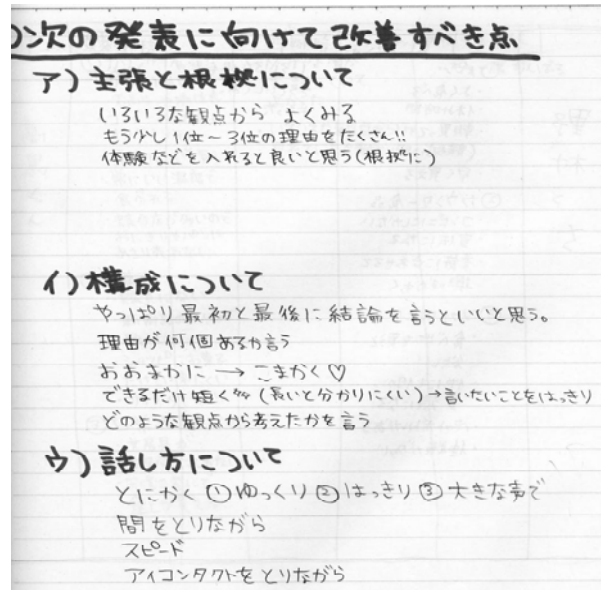
平成18年度は「国語総合」において、学習指導要領に定められた「話すこと・聞くこと」領域の内容 ア「様々な問題について自分の考えを持ち、筋道を立てて意見を述べること」に関

する評価の方法を検討した。

18年度の研究により、「話すこと・聞くこと」領域における評価を適切に行うためには、以下の2点が有効であることが明らかになっている。

- ① 各時間ごとに設定した評価規準に基づき、学習の蓄積としての「ノート」記述をもとに学習過程を評価すること。

学習者のノート



口頭での中間発表を終えた際に書かれた上記のノートには、「次の発表に向けて改善すべき点」が書かれている。

例えば、イの構成に関しては、

「やっぱり最初と最後に結論を言うといいと思う。」

おおまかに→こまかく

できるだけ短く(長いと分かりにくい)

言いたいことをはっきり

と書いている。

この記述をもとに、この学習者に対しては、

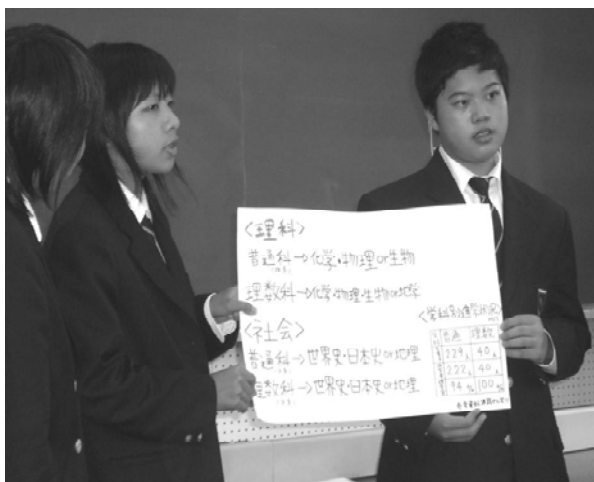
- ・次の学習に向けての意欲が高まっていること
- ・「良い発表の在り方」に関する知識理解が深まっていること
- ・「筋道を立てて意見を述べる」能力が高まっていること

などについて、評価することができる。

「話すこと、聞くこと」領域における評価は、音声記録の困難性から、学習過程を評価すること

は非常に難しいとされていたが、平成18年度の研究によりノートに書かれた記述をもとに学習過程を評価することは有効であることが明らかになった。

② 単元で設定した評価規準に基づき、発表会におけるパフォーマンス、つまり「学習成果」を評価すること。



ポスターを使って発表する学習者

平成18年度の実践においては「筋道を立てて意見を述べるために、①主張を支える根拠を示している。②「発表内容の構成や話し方を工夫している。」という評価規準に基づき、これまでの学習成果である「発表会における各班の発表」に対する評価を行った。これによって、学習者の「話す・聞く能力」がどの程度育っているのかをみることができた。

話す・聞く能力を評価するためには、実際に行う発表を評価することは必要不可欠であると考えた。

以上のことから、「話すこと・聞くこと」領域における評価を適切に行うためには「学習過程」と「学習成果」の2つを評価の対象とすることの有効性が明らかになったといえる。

このような平成18年度の研究成果を踏まえ、平成19年度は「現代文」について、学習指導要領の内容「オ 目的や課題に応じて様々な情報を収集し活用して、進んで表現すること」に関する評価の規準と方法について調査研究を行った。調査研究の対象は以下のとおりである。

[調査研究の対象]

学年	第2学年 理数科(34人)	
領域	現代文「話すこと・聞くこと」領域	
内容項目	オ 目的や課題に応じて様々な情報を収集し活用して、進んで表現すること	
単元	「全国一斉学力調査は是か非か」	
題材	平成19年度 岩手大学 人文社会学部 「国語」入試問題 (朝日新聞4月21日付記事「全国学力調査40年ぶり実施へ」を改変して作られた問題)	
評価の観点	関心・意欲・態度	様々な情報を収集し活用した上で、進んで表現しようとしている。
	話す・聞く能力	①収集した様々な情報を、自分にとって利用しやすい形や内容に整理し、役立てている。 ②聞き手からの反論を予想した上で、自らの考えを音声言語にて論理的に表現している。
	知識・理解	音声言語にて表現する際に必要な様々な工夫を理解している。

本単元における評価規準について

本単元における評価規準は、高等学校国語科学習指導要領「現代文」の内容「オ 目的や課題に応じて様々な情報を収集し活用して、進んで表現すること」をもとに作成した。

- この内容オについて、田中孝一氏は、
- ・教科「現代文」が必ずしも読解指導に限定されていないこと。
 - ・情報の収集と活用の能力の育成と共に、表現指導を取り入れることが求められていること。
 - ・したがって、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が、一定の学習目標として要求されていること。(2005 田中孝一 『高等学校・新教育課程の授業と評価 国語』 学事出版)

を指摘している。つまり、教科「現代文」においても、「話す・聞く能力」の育成が求められているといえる。そこで、本単元の評価規準は、内容を踏まえた上で

- ① 収集した様々な情報を、自分にとって利用しやすい形や内容に整理し役立てている。
 - ② 読み手からの反論を予想した上で、自らの考えを音声言語にて論理的に表現している。
- と設定した。

①のポイントは、「様々な情報」にある。本教材の主たる素材は新聞記事である。生徒自身が必要に応じてweb上の記事・書籍・他の新聞記事などの様々な情報を収集し、活用する能力は今後ますます必要となることから①を設定した。

②のポイントは、まず「読み手からの反論を予想」にある。自分の置かれた立場とは逆の視点から思考することによって、複眼的思考力の育成を図る。また、本単元では「話す・聞く能力」の育成を主たる目標としていることから「音声言語」によって自らの考えを伝える際に意識する必要があること（一文の長さや、ナンバリング・ラベリングの効果）に注意させる。さらに「論理的」という点では、「客観的かつ、妥当性がある根拠を、具体例を添えて分かりやすく示すこと」が、説得力のある意見につながることを確認しつつ授業を展開する。

平成19年11月に出された「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」では、今後国語科が改善すべき方向性として、言語を活用して論理的に思考し表現する能力の育成を重視した改善が必要であることを指摘した上で、高等学校国語の科目「現代文B」では、具体的な改善すべき内容として、

話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、読む能力のみならず、読んだことをもとにして考え、判断・評価し、それをまとめて論理的に表現する能力を育成することを挙げている。これは、平成17年度高等学校教育課程実施状況調査や、PISA2003年調査におい

て、理由や根拠をもとに記述する問題や、文章を読んで自分の考えを記述する問題で無解答率が高かったことをふまえての指摘であろう。このことから、「論理的に表現する能力」を育成することは重要だと考え、②を設定した。

本単元における題材と学習課題について

本単元は、平成19年度岩手大学人文社会学部入試問題「国語」を題材として学習を展開した。

新聞記事をもとに賛成派の意見を展開するという岩手大学の入試問題は、本単元の評価規準①「様々な情報」を②「論理的に」表現する力を培うために適した題材であることから「全国一斉学力調査は是か非か」を学習課題とした。

本単元と年間指導計画との関連について

以下に示すのは「現代文」の年間指導計画である。

時期	教材	評価の規準	a	b	c	d	e
4月	考える楽しみ (評論)	・哲学に関する筆者の主張を読み取っている	○			◎	○
6月	山月記(小説)	・「李徴はなぜ虎になったのか」を読み取っている	○			◎	○
6月 7月	道具と文化 (評論)	・「道具と文化」に関する筆者の主張に対して、具体的な論拠を明確にした上で意見文を書いている	○		◎		○
9月	個性神話のパ ラドックス (評論)	・個人の生き方や価値観について、自分なりの考えを深め、意見文を書いている	○		◎		○
10月	全国一斉学力 調査の是非 (新聞記事)	・目的や課題に応じて様々な情報を収集し活用して、進んで表現する	○	◎			○
11月	こころ (小説)	・「なぜKは自殺したのか」を読み取っている。	○			◎	○
1月	想像としての 現実 (評論)	・現実と想像力との関係を、読み取っている。	○			◎	○
2月	誘惑する情報 (評論)	・自分と情報との関係について、意見文を書いている。	○		◎		○

表中の「a」は、関心・意欲・態度 「b」は、話す・聞く能力、「c」は書く能力 「d」は、読む能力 「e」は、知識・理解を指す。

本単元は年間指導計画において10月初旬に位置づけられている。「話すこと・聞くこと」の領域に関しては、4月からの各単元における学習において、「話すこと・聞くこと」の言語活動を取り入れることによって、副次的にその学力を培ってきた。

また「書くこと」の領域に関しては、4月の「道具と文化」から、9月の「個性神話のパラドックス」までの単元では一貫して、「自分の考えを言語化する」という学習活動を取り入れる中で、「論理的に自分の考えを表現する力」を培ってきた。

これらの学習をふまえて、本単元においては「様々な情報を活用した上で、自らの考えを音声言語にて論理的に表現する」という言語能力を育成した。

まず、特に「個性神話のパラドックス」で培った「読み手からの反論を予想して、論理的な表現を工夫する能力」を、今回の学習に生かすよう指導する。

これによって、主張を支える根拠を明確に示し、考えを述べる際の構成や話し方を工夫することができる。と考える。

このように、複数の単元を構造化し、「話す・聞く」「書く」「読む」領域の学習単元も有機的に関連させることができるよう、年間指導計画を立てている。

2 児童生徒の学習の実現状況と考察

以下に示すのは本単元における評価規準(全7時間)である。

時間	評価規準
1	賛成派の意見を再構成して、図に示している。
2	反対派の意見を再構成して、図に示している。
3	賛成派の意見に対する反論を作成している。
4	賛成の立場から述べられた新たな意見を聞き、それに対する効果的な反論を作成している。

5	予想される反論を考慮しながら、賛成派の立場に立った意見を作成している。
6	定期考査提示された反論をふまえた賛成派の立論を作成している。
7	「様々な情報を活用し、自らの考えを音声言語にて論理的に表現する」ためには、どうすればよいかを理解する。

この評価規準に基づいて、学習過程と学習成果の両面から評価した結果、「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「知識・理解」いずれの項目においても全員が評価規準を実現する結果となった。

学習過程については、ノートに学習の足跡が豊富に蓄積されており、豊かな学習を行ったことを確認できた。2月の発表時には、ノートに残された学習過程を提示した上で、学習者の学びの状況について考察を深めたい。

学習成果については、今回実際に発表を行わせ、それを評価するのではなく、定期考査において作成させた発表原稿を評価するという手法をとった。(3 評価方法に関する研究成果にて詳述)

発表原稿を評価した結果、

- ① 収集した様々な情報を、自分にとって利用しやすい形や内容に整理し、役立てている。
- ② 読み手からの反論を予想した上で、自らの考えを音声言語にて論理的に表現している。

という評価規準を全員が満たしていることを確認できた。

今回の学習において、全員が評価規準を満たすこととなった理由については、以下の2点が考えられる。

- ① 単元の冒頭に学習者と指導者が評価規準を共有した上で、学習を展開したこと。

今回の学習過程において、学習者は評価規準に示された観点を意識して学習を深めていった。定期考査の課題とした「発表原稿の作成」も、評価規準の観点を意識して行っていた。

評価規準を学習者と指導者が共有することによって、指導や評価を有効に行うことができたと言えよう。

- ② 他者との交流活動を促すような学習形態をとったこと。



他者との意見交換を行う学習者

上の写真は、グループ内で意見交換を行いながら、提示された意見文に対して、反論を練り上げている場面である。

今回「話す・聞く能力」の評価規準として設定した「聞き手からの反論を予想した上で、自らの考えを音声言語にて論理的に表現している」を満たすためには、様々な角度から自らの意見に対する反論可能性を検討しなければならない。

そこで、ある時は隣同士で、ある時は4人グループで意見交換を行わせる活動を多く取った。

交流活動を行った授業における振り返りにおいて、多くの学習者が他者との交流の有効性を指摘している。ある学習者は、

「効果的な反論作成のためには、みんなで、きちんと話し合う。(文殊の知恵)自分だけの頭じゃ気づかないところもあるし。様々な視点から見るのが大事。自分1人の発想では全く及ばないことをつくづく感じた。」

と記している。他者との交流を通して、様々な角度から自らの考えを検討することの重要性を実感したことがわかる。多くの学習者が同様の記述を行っているが、このことから、他者との交流活動を促すような学習形態をとったことの有効性を確認できる。

3 評価方法に関する研究成果

本研究では、前年度の研究成果を生かし、学習過程と学習成果の両方に対して評価を行った。

A 学習過程に対する評価

学習過程全体を ①行動の観察 と ②ノート記述の分析 によって評価した。

① 行動の観察

自分の考えを記述する活動・話し合う活動、それぞれの活動場面における学習者一人一人の行動を観察することによって、評価を行った。

② ノート記述の分析

各時間における学習者のノート記述に対して、評価規準に基づき分析を行った。

上に示したのは、第2時における学習者のノート記述である。

第2時は、

- ① 指導者によって音読された、学力調査に対し

て賛成の立場からの意見を、ノートに記述する（ノートの左側）。

② 読まれた意見に対する反論を付箋に記し、相手の意見のどの部分に対して、どのような反論を行うかを整理する（ノートの右側）。

という学習活動を行った。

このノートを作成した学習者は、まずノート左側に指導者が読んだ意見を「現状分析」「プラン」「発生過程」「メリット」「重要性」に分けて見事に整理している。

ノート右側には、「全数調査でなく、抽出調査で十分」など、反対の立場からの的確な反論を、9つの観点から書くことができている。また、量が多いだけではなく、「きめ細かい調査は自治体の方が実態にあったものができる」「自治体・学校が序列化される」など、根拠の明確な質の高い反論を書くことができている。

以上のノート記述より、「賛成の立場から述べられた新たな意見を聞き、それに対する効果的な反論を作成している。」という本時の評価規準をこの学習者は十分に満たしていると判断し、評価はAとした。

学習者のノートからは、学習者が「本時において、何を、どのように学んだか、どこにつまずいたか」をはっきりと読み取ることができる。

このことから、ノート記述を評価規準に基づいて分析するという評価方法は、きわめて有効であると言えよう。

このようにして、学習の過程を、①行動の観察、②ノート記述の分析という方法を用いて評価することは指導と評価の一体化を図る上でも大変効果的な方法であることが、本研究の成果として確認できた。

B 学習成果に対する評価

学習成果に対する評価として、定期考査において、以下のような問題を出題し評価を行った。

あなたは、「全国学力テストは実施すべきか」という論題のディベートに賛成派として参加す

ることになった。賛成派の主張を行うとすれば、どのように述べるか。なお、反対派からは、全数調査では正確なデータが反映されないことから、生徒の学力把握は的確には行われず、その結果、学校や教師の対応も間違っただけになり、結果的に学力の向上は図られない、という反論が提出されることがわかっている。

あらかじめこの反論を阻止できるような賛成派としての立論を、ディベートに参加しているつもりで作成せよ。

さらに、「自らの考えを

- A 反論をふまえた上で
- B 根拠を挙げながら
- C 筋道を立てて

表現しているか」という採点基準を、考査を行う前に学習者に提示し、考査を行った。

以上のように、本研究では学習の過程全体を、行動の観察とノート記述の分析によって、また学習成果を、ペーパーテストによって評価を行った。

本発表においては、授業の様子を撮影したビデオや学習者のノートに対する分析を通して、今回行った評価方法の有効性を中心に、考察を行っていく。

4 成果の普及と今後の展望

平成19年8月5日に全国国語教育研究大会、8月23日には福井県高校教育研究会において、本研究の成果を発表した。また、10月12日に公開研究授業を行ったところ、日本教育新聞（12月3日付）に本研究の概要と共に紹介された。

今後は更に研究を深め、全国大学国語教育学会、日本国語教育学会等における研究発表、論文投稿を通して、本研究の普及を図りたい。

また、「話すこと・聞くこと」領域における評価についての研究成果を生かし、「読むこと」「書くこと」領域における評価の研究を進めていきたい。